

マイナス三〇度の世界における考え方

教育学科長

西岡

正子

今日は七月七日の七夕なので、少しはロマンチックな話をしなくてはならないと思うのですが、ロマンチックではなく苛酷なマイナス三〇度の世界の話をさせて頂きます。

去年一年間、カナダのカルガリー大学に研修に行かせて頂きました。これだけは七夕と少しは関係がありますが、お正月にイエローナイフという所に行きまして三日間だけでしたが、夜空を見上げてオーロラを見ました。大空のロマンといいますが、宇宙の神秘に感動しました。しかし、それ以上に驚嘆したのは日本からオーロラを見る為に現地の一つのツアー会社が扱うだけで四百人という人がやってくることです。ツアー会社は幾つもありますのでカナダ最北の小さな町が、オーロラを見に来る日本人に占拠されているような状態です。日本人相手の日本人が運営しているツアー会社の対応は総てスムーズで、久しぶりに日本に帰ったような気分でした。

カナダに住むと、日本の生活がいかにサービス過剰で便利かとつくづく感じます。お金さえ払えば、自分で決定することなく、我慢することもなく、総てが動いていきます。カナダという国に暮らしていると、総て自分で決定し、スムーズにいかない事務処理等に対し我慢の繰り返しです。その代り自分で判断し、工夫した分は道が切り開かれていくという思いをいつも感じることもできるという生活です。

私のいたカルガリーは冬になるとマイナス三〇度またはそれ以下になることが多いのです。マイナス二、三度でしたら、学生達はノースリーブでキャンパス内をうろうろ歩いています。マイナス一五度までは大したことはありませんが、マイナス二〇度の壁は厳しく、マイナス二〇度以下になるともう命の危険を感じます。マイナス三〇度になりますともう、勘弁してくれという気持ちになります。

カルガリーの小学校はマイナス三〇度までは防寒具を着て、必ず休み時間は子供達を外に出して遊ばすというをしています。カルガリーはロッキー山脈の近くで、ロッキーから風が吹いてシュヌツクという現象が起きますと、マイナス一五度から突然プラス一五度に気温が変わります。それが一週間ほど続きます。

京都人の私にとっては苛酷な気候ですが、カルガリーの人達は、これがカルガリーの良いところだとこよなく愛しているのです。極寒の中シュヌックになれば、友人のもっている森のロッジの庭でファイアーを囲んでワインを飲みながら芸術や文化や人生を語り合います。山歩きに出かけます。いつ何時命に関わるマイナス三〇度や猛吹雪がやってくるかはわかりません。小さい時から慣れているからでしょうか、それに気候のことですから、誰に文句を言うわけにもいかず、受け入れて、それに対処して生きていかなければなりません。命に関わる苛酷な日々が毎年やってくるということを受け入れ、そして新緑の春、花の夏、紅葉の秋を楽しむというのが人生です。一年間というのは苛酷な時期と花の咲き乱れる時期があるのです。人生には良い時も悪い時もある、それをしっかり受け止めて生きていこう、私の周りにはそういう考えの人達が沢山おりました。

まだ、ダウンヒルスキーしかしたことがないと言うと、友人や同僚達がクロスカントリースキーに連れて行ってくれました。想像していたのとは違って森の中をかなりのスピードでアップ、ダウンしていくというとてもハードなものでした。そのころは体力に自信のあった私も、ダウンヒルとは違う靴やスキー板に慣れず何度も転けてしまいました。その時、助け起こしてくれる友

人や同僚達の慰める言葉の意味が皆同じなのです。あまりに勢いよく転けてウンザリしている私に「こういう風に転けるのも含めて、クロスカントリーの楽しさなんだよ。」「転けて痛いのも含めてクロスカントリーの醍醐味なんだよ。」と言うのです。

いったい何十年カルガリーに住んでいるのと言われるくらい沢山のお友達、それも大学には一切関係のない親友ができました。やはり私と同年代の四〇代五〇代の人達です。半世紀を生きてきたのですから、その間、苦しい時も辛い時もあったことでしょう。私のカルガリーの友人達はいくつもの困難を乗り越えながら、背筋をまっすぐ伸ばして、強く生きている、そんな印象を与える人達でした。彼等と話すと、幸せな時も不幸せな時も総て含めて人生なんだという共通した人生哲学をもっていることに驚きます。そのように人生を大きく受け止めて、かつ新たな挑戦に果敢に挑んでいく。それがマイナス三〇度の世界の考えなのだと、私はカルガリーで何度も思いました。

日本人の友達はほとんどいず、日本語でしゃべることができるのは日本から移住してきたお寿司屋さんの大将だけでした。カルガリーには、沢山の寿司屋があります。ダウンタウンにはカウンターで握ってもらえる寿司屋、レインボーロールやダイナマイトロールなどと変った巻きずし

を出す寿司屋など多くの店があります。大学のカフェテリアの牛丼屋の隣も寿司屋でした。情報工学部の建物の一階の店は昼食にお寿司を握ってくれました。大学にあるような小さい店で握っているのはベトナム、中国、韓国からの移民で日本人ではありません。客もほとんどは日本人ではありません。

ダウンタウンのカルガリーでは老舗という寿司屋の大将は、熊本から移住してきた日本をこよなく愛する日本人でした。いつも私に愚痴をこぼします。手伝いの若者が長く続かないのです。最後に挨拶に行った時は大将一人で働いていました。日本から大学を出た随分多くの若者が働かせてくれとやって来るそうです。しかし最近の日本の若者は雇っても雇っても直ぐ辞めるそうです。「日本の国は一体どうなっているんだ。日本の若者は嫌なことは絶対受け入れないし、少し注意したら直ぐにキレて辞めてしまう。他の国の若者にくらべて辛抱が足らない。こんなことで日本は滅びてしまう。」日本の大学教育はいつたいうようになっていくのかと言うのです。大学教育と言われますと、なんとか答えなくてはなりません。佛大の優秀な学生の話をして慰めたり、それ以前の家庭教育に問題があるなどと逃げながらも、遠く離れて日本教育について色々話をすることができました。

便利過ぎる日本における教育の難しさや、気候と風土との関係など、日本の教育について、何十年も日本を離れている日本人と話すことができたのもカルガリーにおける貴重な経験でした。

教育に携わる者として、全く違う気候、風土の中で一年間を過ごし、そこに住む多くの人達の考えに触れたということ。遠く離れて日本を思う日本人と日本について考えたということ。これらの体験を、これからの教育、研究に生かしていくことができばと思います。本日は有り難うございました。

(平成十六年七月七日 水曜洗心アワー)